

東方機人録 ～龍神創造  
伝～

龍澤 マサヤ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

『幻想郷』それは、忘れられたものが集う場所。

そこに導かれ、現れた2人の青年。龍澤 雅鶴と龍澤 悠哉。

この2人の青年は幻想郷で、どう生きるのか。

憧れたあの英雄の面影を追いかけ、どう成長するのか。

死を招くのか、生へ導くのか…。

救うのか、破壊するのか…。

彼らの物語を、どうか最後まで見届けて欲しい…。

# 目次

第1章 幻の世界 幻想郷

第1話 ここ……どこ…… | 1

第2話 いつもの2人 | 5

第3話 幻想郷の説明会……？

9



# 第1章 幻の世界 幻想郷

## 第1話 (一)……(二)……

これは、とある人間が幻想郷を救う物語……

そして、世界を変える物語……

~~~~~

雅鶴「生きてるか……？」

悠哉「まあ……多分……」

どうしてこうなった……？ 確か、あれは4時間くらい前のこと……

~~~~~

雅鶴「おい、起きろ。」

悠哉「何……？ まだ朝5時だよ……」

雅鶴「今日は予定がある。朝食できてるから、食べて。」

悠哉「うん……」

俺は龍澤雅鶴。何の変哲もないただの高校生。

そしてこいつは龍澤悠哉。以下同文。

言うとならば、歳が1つ下だということだけだ。

悠哉「…今日の予定ってなんだっけ…？」

雅鶴「マジか…。忘れるなよ、何年やってると思ってたんだ…。」

悠哉「小…4から…だっけ？」

雅鶴「そうだが…。なぜそこだけ覚えてるんだ…？」

悠哉「そこはどうでもいいから、今日の予定は？」

雅鶴「どうでもよくはないが…。今日から『山籠り』だろうか？」

悠哉「あ…。あれか。」

『山籠り』とは、俺達が小学4年生の頃から夏休みと冬休みに行っている、恒例行事である。

主に修行紛いのことをするのだが、なかなか過酷である。

雅鶴「準備出来たな？じゃ、行くぞ。」

バスに揺られること3時間。そこから目的の山『博麗山』の登山道に入る。

山道を歩くこと1時間。これでやっと着くのだ。

悠哉「はあ…やつと着いた…。」

雅鶴「もうへばってんの？だらしなそ。」

悠哉「うるせえよ、体力おぼけ。」

雅鶴「いいから、手を合わせなさい。これから守ってもらうんだからな。」  
そう言いながらボロボロの神社に手を合わせる。

この神社の名前はわからない。地元の人もわからないそうだ。

いつからあつて、なんのために作られたのか……。謎に満ちた神社である。

……とまあ、そんなこんなで野宿の準備に入ろうと思う。

すると、悠哉がいきなり大声を出しながら駆け寄ってきた。

悠哉「おーい！兄ちゃん!!!」

雅鶴「なんだ？ツチノコでも見つけたか？」

悠哉「いや、ツチノコなんて比にならないよ……！」（ぜえぜえ

雅鶴「何があつた？」

悠哉「わからない。確認しに行きたいんだ……。着いてきてちょうだい……。」

少年移動中……

雅鶴「何があるって……。」

……地面になんかある……。深い闇、そしてそこに浮く紅い目玉。

まるでそこに『スキマ』が空いたかのように、口を開けている。

雅鶴「なんだこれ……」

悠哉「薪を拾いに来たらあつてさ……」

見れば見るほど不気味だ。

そう思った瞬間、穴が急速に広がり始めた。

雅鶴「逃げ……！」

逃げろ、そう言おうとした時にはもう、穴の中だった。

~~~~~

雅鶴「で、今に至る……これで合ってるよな？」

悠哉「合ってる……」

雅鶴「てかここどこだ？」

??? 「私が説明致しますわ。」

雅鶴「だ……誰だ……！」



## 第2話 いつもの2人

雅鶴 「だ…誰だ…！」

??? 「あら、これは急に失礼したわね。」

雅鶴 「……名前ぐらい名乗ったらどうだ…。」

??? 「あら、女性を急かす男性は嫌われますわよ?」

彼女はそう言いながらくすくすと笑う。うるさい、と言ってやりたいが我慢しよう。

??? 「私の名前は『八雲やくもゆかり 紫』…この幻想郷を古くから見守る妖怪ですわ。」

悠哉 「妖怪…!?!」

雅鶴 「んなもんがいるわけ…?!?!」

紫 「どうかなさいまして?」

身体が強ばっている。まるで「彼女は危険だ」と言い張る様に。

それに、怖いのだろう。純粹に…。

彼女の背後にあるその裂け目が、妖怪であることを示している。

そこから来る恐怖、威圧感によって身動きが取れない。

そんな中、声を絞り出して会話をする。

雅鶴 「…よ…妖怪という非科学的なものがあるなんて…有り得ん…。」

そうだ。有り得ないのだ。妖怪という非科学的なものがあるなんて事は有り得ないのだ。

だが、現にこうして目の前にいる。その事実が変わらない。

紫 「そう、ここではない。外の世界なら有り得ない事。でも、ここ幻想郷ではこれが普通よ。」

悠哉 「これが…?」

紫 「ええ、詳しくは『レイム』の所で話しますわ。ついてらっしゃい。」

そう言うのと彼女は歩き始める。ゆっくりと…。

さっきの裂け目を使えばいいのに…、と思いつつもついて行く。

だつて見失うとヤバそうなんだもん。

~~~~~

「……はあ。」

??? 「よお霊夢。どうしたのぜ? そんなつまんなさそうな顔して。」

霊夢 「なんだ、魔理沙か。」

魔理沙 「なんだとはなんだ。遊びに来てやってるんだよっ♪」

にしし、と満面の笑みを浮かべる。

霊夢 「お茶なら自分で淹れてちょうだい。」

魔理沙 「ええ……。あくまでも私は客人だぞ……。それくらいやつてくれてもいいじゃないか……。」

霊夢 「別にいいじゃない。あんただから言えるのよ。」

魔理沙 「え……あ……／＼／ 急に恥ずかしいこと言うなよ……／＼／」

霊夢 「え……。何顔真つ赤にしてるのよ……。」

魔理沙 「引かれたっ!!」

そう、これがいつもの会話。魔理沙とは、幼馴染と言つていい程の付き合いだ。

魔理沙 「にしても、霊夢ってだいたいぶ丸くなつたよなあ。」

霊夢 「そう?」

魔理沙 「ああ、そりやもう。ちよつとしたことなら怒んなくなつたじゃんか。」

霊夢 「失礼ね……。まるで私が怒りつぽいみたいじゃない……。」

魔理沙 「そんな事ないぜ? 霊夢はいつでも優しいじゃ……。」

ドスンつ!! 鳥居の前に人が落ちてきた。

霊夢 「何?! なんなの!？」

私は慌てて、見に出た。……なぜこんな所に人、それも「外の世界」の人間が……。すぐに確信できた。奴らは「外の世界」の人間だと。その理由は……

紫 「こんにちは、  
霊夢♪」  
ヤツのせいだ……。

### 第3話 幻想郷の説明会……？

霊夢「で、なんの用？」

紫「冷たいわねえ……。今日はこの方達を紹介しようと思つて来たの。」  
そんな会話をしながら、彼女らがこつちを見る。

片方の女性は紅白の巫女服のようなものを纏っている。

片方は：言わなくてもいいか。：八雲さんだ。

雅鶴「えつと：あなたは：？」

霊夢「私？私は霊夢、博麗<sup>はくれい</sup> 霊夢<sup>れいむ</sup>。ここで巫女をしてるわ。」

巫女：間違つてはなかつた。だが驚きだ。

俺と同じ年、もしくはそれ以下の女性が、ここで巫女をしているなんて。

雅鶴「えつと、ここで幻想郷についての説明をしてもらえるってきいて

きたのですが……。」

霊夢「あら、やつぱり外の世界の住人？私はそこまで暇じゃないの、他

を当たってもらえるかしら？」

：やけに冷たいな。苦手かもしれん。

なんて考えていると、社の方からもう1人女性が出てきた。

??? 「なんだ霊夢。また参拝客をいじめてるのか？」

霊夢 「いじめてなんかないわよ。人聞きの悪いこと言わないでちょうだい。」

??? 「私にはいじめてるようにはしか見えないぞ？」

悠哉 「…増えた。」

??? 「ああ、名乗り忘れてたな。私は魔理沙、霧雨<sup>きりさめ</sup> 魔理沙<sup>まりさ</sup>だ。よろしくな♪」

雅鶴 「あ、ああ…。よろしく…？」

霊夢 「じゃ、私は昼寝でもするわ。」

魔理沙 「おいおい、そりやないだろ？簡単にでも説明してやれよ…。」

霊夢 「私だって忙しいの。」

紫 「あら、説明してくれるならしばらくの食料と労働力を提供するわよ？」

霊夢 「ほんと!？」

酷い変わり様だ…。現金な人…にしか見えないな。

などと思っていると、すぐに神社の隣にある家へ通された。

これからどうなるんだろうかというワクワクと不安が混じった複雑な気持ちを胸に、

家へあがらせてもらった。

霊夢「まあ、適当にそこ座って。」

先程の冷たい声とは一変して、とても上機嫌な声となっていた。

そこまでこの家は食料が足りてないのだろうか…。心配になってくる。

魔理沙「私も失礼するよ。」

紫 「じゃ、私も。」

霊夢さんの一声で皆各々座り始める。自由にも程があるんじゃないか、と言いつつも程を我慢して、俺達もホコリひとつない程綺麗に掃除された畳に腰を下ろす。

魔理沙「霊夢ー、お茶とお菓子は無いのかー？」

霊夢「あのねえ、紫とこの人たちはお客様なの。魔理沙も少しは弁えなさい？」

魔理沙「れ、霊夢に言われるとは……………」

紫 「ふふ、相変わらず仲がいいのね♪」

なんだこれは…。みんなして自由すぎる…。

これが正解なのか…。？わからんぞ…………？

なんてことを思いながら霊夢が座るのを待った。

霊夢「ふう、さて…幻想郷について、だったかしら？」

紫 「ええ、お願いね。」

霊夢「わかったわ。それじゃあ、外の世界の住人にこの世界の理を教えてあげる。」

霊夢さんの目が、いきなりキツと細くなる。  
ただ事じゃない気配を感じながら俺達は耳を傾けた。